

巻頭言



論より証拠

(公財)日本植物調節剤研究協会 評議員
(一社)日本植物防疫協会 理事

藤田俊一

英語では「プディングの味を確かめる一番いい方法は食べてみる」と言うのだそうだが、農薬関係の仕事をやっていると、しばしばこの諺に思い当たることがある。

昭和から平成に変わる頃だったと思うが、全農から「農薬の必要性をデータにしたいので協力してほしい」と相談いただいた。当時、国が全国の農業試験場にアンケートを行って農薬が使えなくなった場合の減収率を推定していた（念のために言うと、これは中東の石油危機が勃発した際の国内産業への影響分析が目的であった）が、消費者に農薬の必要性を納得してもらうのにアンケート結果だけでは説得力がないというのである。たしかに病虫害や雑草害の実験データはたくさんあるのだけれど、それらを寄せ集めてもなかなか説得力がでてこない。2年ほど試行錯誤しているうちにこの話に農薬工業会も乗りだし、農薬を使わなかったらどのくらい減収するかの実証試験を全国規模で行うことになった。当時まだ若かった私は、その意義を深く考えることもないまま各県のベテラン研究者らと試験をすすめることになったのだが、どうせやるなら各地の消費者やマスコミも呼んで病虫害や雑草の被害実態も見てもらおうということになった。ところがこの取り組みは、私の浅はかな理解の範囲を超えてずいぶん大きなインパクトがあったようで、無残なりんごの樹を見にやって来た反農薬で有名な某紙の記者などは「農

薬がなくても収穫できると思っていたのに」と、翌日の地方版に驚きをもった記事を掲載してくれた。中には「やらせじゃないの?」と言うひねくれ者もいたが、被害実態を目の当たりにした消費者の反応はおしなべて新聞記者以上であった。雑草害で収穫皆無となった水田には私も驚かされた。県の病虫害研究者たちが非常に熱心だったのにも驚いたが、彼らにしてもこういう試験をやってはじめて分かったことが多かったそうである。この実証試験はその後も断続的に続けることとなり、今では様々なところで引用いただいているが、当たり前のことをきちんとデータで示すことの社会的な意義に気づかされた取り組みだったと思っている。

当たり前だと思っているのにデータがないというケースは意外に多い。その後も色々な相談をいただいてそれぞれ全く異なる分野の調査に取り組んだが、やってみると当たり前と思っていたことがあらためて確認できるだけでなく、意外な発見もあってなかなか興味深いものである。「論より証拠」的なアプローチは科学の中のひとつのやり方にすぎないが、農薬をとりまく課題の解決には大切な考え方であると思う。あれから四半世紀がすぎ、農薬の必要性に対する理解は確実にすすんできたと思うが、これからもこの諺を忘れないようにしたいと思っている。